

Typst を用いた 情報処理学会全国大会テンプレート

山田太郎 山田花子

愛知工業大学情報科学部 愛知工業大学大学院経営情報科学研究科

1 はじめに

吾輩は猫である。名前はまだ無い。どこで生れたか
んと見当がつかぬ。何でも薄暗いじめじめした所で
ニャー

吾輩は猫である。名前はまだ無い。どこで生れたか
んと見当がつかぬ。何でも薄暗いじめじめした所で
ニャー

2 関連研究

吾輩は猫である。名前はまだ無い。どこで生れたか
んと見当がつかぬ。何でも薄暗いじめじめした所で
ニャー[1]

吾輩は猫である。名前はまだ無い。どこで生れたか
んと見当がつかぬ。何でも薄暗いじめじめした所で
ニャーニャー泣いていた事だけは記憶している。吾輩
はここで始めて人間というものを見た。しかもあとで
聞くとそれは書生という人間中で一番獰悪な種族で
あったそう。この書生というのは時々我々を捕えて
煮て食うという話である。しかしその当時は何とい
う考もなかったから別段恐いとも思わなかった。ただ
彼の掌に載せられてスーと持ち上げられた時何だかフ
ワフワした感じがあったばかりである。掌の上で少し
落ちついて書生の顔を見たのがいわゆる人間というも
のの見始であろう。この時妙なものだと思った感じが
今でも残っている。第一毛をもって装飾されべきはず
の顔がつるつるしてまるで薬缶だ。その後猫にもだい
ぶ逢ったがこんな片輪には一度も出会わした事がない。
のみならず顔の真中があまりに突起している。そう
してその穴の中から時々ぷうぷうと煙を

3 提案手法

吾輩は猫である。名前はまだ無い。どこで生れたか
んと見当がつかぬ。何でも薄暗いじめじめした所で
ニャーニャー泣いていた事だけは記憶している。吾輩
はここで始めて人間というものを見た。しかもあとで
聞くとそれは書生という人間中で一番獰悪な種族で
あったそう。この書生というのは時々我々を捕えて
煮て食うという話である。しかしその当時は何とい
う考もなかったから別段恐いとも思わなかった。ただ
彼の掌に載せられてスーと持ち上げられた時何だかフ
ワフワした感じがあったばかりである。掌の上で少し
落ちついて書生の顔を見たのがいわゆる人間というも
のの見始であろう。この時妙なものだと思った感じが
今でも残っている。第一毛をもって装飾されべきはず
の顔がつるつるしてまるで薬缶だ。その後猫にもだい
ぶ逢ったがこんな片輪には一度も出会わした事がない。
のみならず顔の真中があまりに突起している。そう
してその穴の中から時々ぷうぷうと煙を

吾輩は猫である。名前はまだ無い。どこで生れたか
んと見当がつかぬ。何でも薄暗いじめじめした所で
ニャーニャー泣いていた事だけは記憶している。吾輩
はここで始めて人間というものを見た。しかもあとで
聞くとそれは書生という人間中で一番獰悪な種族で
あったそう。この書生というのは時々我々を捕えて
煮て食うという話である。しかしその当時は何とい
う考もなかったから別段恐いとも思わなかった。ただ

彼の掌に載せられてスーと持ち上げられた時何だかフ
ワフワした感じがあったばかりである。掌の上で少し
落ちついて書生の顔を見たのがいわゆる人間というも
のの見始であろう。この時妙なものだと思った感じが
今でも残っている。第一毛をもって装飾されべきはず
の顔がつるつるしてまるで薬缶だ。その後猫にもだい
ぶ逢ったがこんな片輪には一度も出会わした事がない。
のみならず顔の真中があまりに突起している。そう
してその穴の中から時々ぷうぷうと煙を

4 実験

吾輩は猫である。名前はまだ無い。どこで生れたか
んと見当がつかぬ。何でも薄暗いじめじめした所で
ニャーニャー泣いていた事だけは記憶している。吾輩
はここで始めて人間というものを見た。しかもあとで
聞くとそれは書生という人間中で一番獰悪な種族で
あったそう。この書生というのは時々我々を捕えて
煮て食うという話である。しかしその当時は何とい
う考もなかったから別段恐いとも思わなかった。ただ
彼の掌に載せられてスーと持ち上げられた時何だかフ
ワフワした感じがあったばかりである。掌の上で少し
落ちついて書生の顔を見たのがいわゆる人間というも
のの見始であろう。この時妙なものだと思った感じが
今でも残っている。第一毛をもって装飾されべきはず
の顔がつるつるしてまるで薬缶だ。その後猫にもだい
ぶ逢ったがこんな片輪には一度も出会わした事がない。
のみならず顔の真中があまりに突起している。そう
してその穴の中から時々ぷうぷうと煙を

吾輩は猫である。名前はまだ無い。どこで生れたか
んと見当がつかぬ。何でも薄暗いじめじめした所で
ニャーニャー泣いていた事だけは記憶している。吾輩
はここで始めて人間というものを見た。しかもあとで
聞くとそれは書生という人間中で一番獰悪な種族で
あったそう。この書生というのは時々我々を捕えて
煮て食うという話である。しかしその当時は何とい
う考もなかったから別段恐いとも思わなかった。ただ
彼の掌に載せられてスーと持ち上げられた時何だかフ
ワフワした感じがあったばかりである。掌の上で少し
落ちついて書生の顔を見たのがいわゆる人間というも
のの見始であろう。この時妙なものだと思った感じが
今でも残っている。第一毛をもって装飾されべきはず
の顔がつるつるしてまるで薬缶だ。その後猫にもだい
ぶ逢ったがこんな片輪には一度も出会わした事がない。
のみならず顔の真中があまりに突起している。そう
してその穴の中から時々ぷうぷうと煙を

参考文献

- [1] kanakanho: TypstTemplate, 全国大会の
Typst テンプレート (2024.10.24), 入
手先 <<https://github.com/kajiLabTeam/ipsj-national-convention-typst-template>>, pp. 1-6.